

## 学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (3)

<sup>1</sup> 榊原健太郎 <sup>1,2</sup> 高田麻美 <sup>1</sup> 小堀馨子 <sup>1,2</sup> 福田八重 <sup>1,3</sup> 大日向 浩  
<sup>1</sup> 岩沼聡一郎 <sup>4</sup> 小薬祐子 <sup>5</sup> 釘田強志 <sup>6</sup> 山本真理子

<sup>1</sup> 帝京科学大学総合教育センター <sup>2</sup> 帝京科学大学教職センター <sup>3</sup> 帝京科学大学医療科学部東京理学療法学科  
<sup>4</sup> 帝京科学大学医療科学部看護学科 <sup>5</sup> 帝京科学大学生命環境学部自然環境学科  
<sup>6</sup> 帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

The report on the coordinator training (3)

<sup>1</sup> Kentaro SAKAKIBARA <sup>1,2</sup> Asami TAKADA <sup>1</sup> Keiko Grace KOBORI  
<sup>1,2</sup> Yae FUKUDA <sup>1,3</sup> Hiroshi OHINATA <sup>1</sup> Soichiro IWANUMA <sup>4</sup> Yuko KOGUSURI  
<sup>5</sup> Tsuyoshi KUGITA <sup>6</sup> Mariko YAMAMOTO

Keywords : コーディネーター、チーム援助、学校心理学、大学教育、研修

### 1. はじめに

周知の通り、現在の日本の大学は同世代人口の半数以上が高等教育を受けるユニバーサル・アクセス型（いわゆるユニバーサル化）の時代を迎えている。そうした状況下にある大学では一般に、学生たちが主体的な学びと成果を手に入れるための学習環境の整備と改善に取り組む一方で、学習意欲の低下や学生生活への不適応などの苦戦状況を示す（ないし潜在的に因子をもつ）大学生をいかに支援できるか、ということが課題となっている。共通・教養教育を担当する本学の総合教育センターは、2011年度に「総合教育センター学生なんでも相談制度」を立ち上げるとともに、本学における学生支援のための相談窓口を整理する役割の一端を担った。本学では現在、助言教員制度、学生なんでも相談制度、学生相談室など、課題別に7つの窓口を学生向けに設置し、学生の多様なニーズを捉える多角的な支援の実現を目指している。その一方でそれら窓口の相互が学生支援体制として有機的にもしくは内在的に十分に結びついていない現状があることも事実である。この点は、2013年度に総合教育センター所属のメンバーを中心に検討した「学生実態調査」の結果における、学生目線から眺めた「大学への支援制度の活用の難しさ」の尺度の示す数値などからも窺い知ることができる。

以上に述べたような問題関心の下、本報告の事業本体である研修は、以下のようなねらいを持つものである。

小・中・高校では学校生活に苦戦する子どもへの

援助において、学校心理学を基盤とした、教師・保護者・スクールカウンセラーなどのチームによる支援が成果を挙げているが、その際、援助者間をつなぐコーディネーターの存在が援助の成否の鍵となることも知られている<sup>1)</sup>。ここでいうコーディネーターとは、学校生活に苦戦している子どもへの援助について、援助資源となる人や機関とつなぐ調整役を担う者を指す。しかも、例えば中学校ではこのコーディネーター役を学年主任が務めているという。つまり、必ずしも心理学などの専門家ではなくとも優れた働きをしているというのだ。このことから、心理学の専門家でなくてもコーディネーターの役割を担うことは不可能ではないと判断できる。本学での学生支援の取り組みにおいてチームによる支援（チーム援助）を実践するため、本研修では2013年度より学内の教職員を対象としたチーム援助コーディネーターを養成することを意図して、志ある教員により、自主的な研修活動をスタートさせている<sup>2)</sup>。学生なんでも相談制度や助言教員制度、各種窓口を通じた学生指導・学生相談のあり方に関心を抱く教職員ならば、守秘義務の遵守を条件として、誰でもこの集いにご参加頂くことが可能である。コーディネーターとしての研修を積み、チーム援助コーディネーターとして実際に活動してもらうことがこの研修のねらいである。

### 2. 研修計画

コーディネーター養成研修は今年度で3度目の開催である。これまでの研修は、援助についての学問

体系である学校心理学（石隈，1999）<sup>1)</sup>を基盤としつつも、文献による講義に終始することなく、カウンセラーなどの現場の方を交えた学習を重視しており、今年度もこの方針を踏襲した。今年度は、昨年度以前からの参加者だけでなく、初参加者も出席したことから、基礎と実践との両方が学べるように4つのセッションを企画した。表1がその研修内容である。なお、昨年度以前は総合教育センター共通研究費の支援を受けたが、今年度は特定の組織に基づく研修会ではなく、研修の必要性を感じる有志から成る自主研修という形式で実施した。

「援助についての基本的な考え」と「学校心理学の基礎理論と援助の捉え方」のセッションでは、元中学校教師で、学校心理学の専門家である千葉大学の樽木靖夫講師から学校心理学の基礎的・実践的な内容を学んだ。「本学におけるカウンセラーとのコンサルテーション」のセッションでは、本学カウンセラーの木村たき子講師から学生支援の事例を学んだ。最後に「全体討論」のセッションを設け、参加者が抱える学生支援の困難と支援策を検討した。

表1 コーディネーター養成研修の計画

	日付	内容	講師	参加数
1	9/15	援助についての基本的な考え	樽木靖夫講師 (千葉大学)	10名
2		学校心理学の基礎理論と援助の捉え方	樽木講師	11名
3	9/18	本学におけるカウンセラーとのコンサルテーション	木村たき子講師 (本学カウンセラー)	7名
4		全体討論	樽木講師	7名

### 3. 研修内容

各セッションの研修内容について、概要を以下に記す。

#### (1) 【セッション1】 援助についての基本的な考え

最初に、2日間の研修全体の目標が示され、その基軸となる「援助」「三段階の援助サービス」「チーム援助」が紹介された。このうち、セッション1では「援助」の説明に重点が置かれた。学校心理学に基づく「援助」とは一般に、学生の危険な状態におかれた要因を他者が取り除く「救助」ではなく、むしろ学生が自らその問題に対して解決する力を身に

つけるように支援することにあることが示された。それは例えば学生が困っている事柄について、「それはこうしなければダメだ」といった具合に押し付ける様な指導をすることではない。援助とはむしろそういうものではなく、本人が困っている事柄を、一緒に整理し、何が問題で、どのようなことに注意し、対処するのが良いかといった一連の作業に寄り添うような支援を目指す。このような支援としての「援助」を通して、本人自身が困っている事柄に対処する力を身につけさせることが重要である、ということであった。

以上のような学校心理学における「援助」概念に触れ、ある参加者は「教職協働」という言葉を連想したという。少子化をはじめとする昨今の厳しい大学運営環境において、掲げられる目標の一つとして聞いて久しい言葉である。本学における「教職協働」を「援助」「三段階の援助サービス」「チーム援助」の観点から捉え直す機会を手厚くすることで、教員や職員における現有の様々な能力や働きが活性化するのではないかと考えたのである。学生への支援・援助を切り札に改革の取り組みを成功させている大学において肝要な点は、「教員だけ」「職員だけ」では決して成功に辿りつかなかったという点である<sup>3)</sup>。本学においても学生支援を教学経営の強みとして方向付ける一策として、本学の文脈から「援助」「三段階の援助サービス」「チーム援助」についての理解や実践を重ね、全学的な取り組みや成果に結びつけることが考えられてもよい。

#### (2) 【セッション2】 学校心理学の基礎理論と援助の捉え方

「学校心理学の基礎理論と援助の捉え方」というテーマで、樽木講師による講義と演習が行なわれた。本学での適用・実施を念頭において、チーム援助での基本として「救助と援助の違い」(先述)、①「チーム援助」、②「アセスメント」、③「コンサルテーションとコーディネーター」、④「学校心理学による三段階の援助サービス」の項目についての講義の後、チーム援助のシナリオロールプレイによる演習活動を行なった。次に講義の要点を記す。

##### ① チーム援助

チームによる援助においては、役割の異なる4種類のヘルパー（心理教育的援助サービスの担い手）とヘルパー間のコンサルテーションを行なうコー

ディネーターが必要となる。精神科医や臨床心理士などの(スクール)カウンセラーは心理的サポートを専門とする《専門的ヘルパー》、教育・研究・学生指導など様々な仕事の側面として心理的サポートも行なう教職員は《複合的ヘルパー》、自発的に援助に関わり、助けたり助けられたりという相互関係にある友人・知人などの《ボランティアヘルパー》、自らの役割の一つとして援助を行ない、生活面・経済面・精神面への影響力の大きい保護者は《役割的ヘルパー》にそれぞれ分類される。大学生の場合、友人の役割が重要と考えられる。

このヘルパーの分類は、専門性や役割の上での分類であり、相互に上下関係はない。4つのヘルパーは同等の立場で協働する関係にあり、それぞれのもつ情報を共有し、困難を抱える学生に対して共通の方針で援助することが重要である。

## ②アセスメント

アセスメントは、学習面、心理・社会面、進路面、健康面の4つの側面から、被援助者の苦戦している「状況把握」を行なうことを主眼とし、「価値付け」の意味は含まない。

学習面では、本人に楽しめる授業や興味を持てる授業があるか否かなどの情報を収集する。場合によっては、大学入学の動機や学習の目的を見つめ直す必要も出てくる。心理・社会面では、自分を受け入れることができるか(心理面)、他者との付き合い(社会面)などについての情報を収集する。進路面では、進路先を決めるのではなく、好きなことや得意なこと、将来の希望についての情報を収集する。健康面では、睡眠状況や食欲など心身の健康についての情報を収集する。小中学校では、保健室の養護教員が把握していることが多いという。

## ③コンサルテーション

コンサルテーションとは、4種類のヘルパーが、被援助者の問題状況についての情報把握に基づき、よりよい援助のあり方について話し合うプロセス(作戦会議)を指す。その目的は、苦戦する学生への援助であり、また、そのプロセスから得られるヘルパーの援助能力の向上である。コーディネーターは、直接的な援助を行なう存在というよりも、コンサルテーションの場における司会などヘルパー間の調整役としての間接的な援助が役割の中心となる。

## ④学校心理学による三段階の援助サービス

援助サービスは、ニーズの程度によって三段階に分けられる。全学生を対象とする一次的援助サービスは、各種ガイダンスや授業などで教職員が日常的に行なっている。登校渋りや学習意欲の低下など苦戦する一部の学生を対象とするのが二次的援助サービスであり、助言教員や友人、保護者などが援助の担い手となる。援助ニーズの最も高い三次的援助サービスは、発達障害や不登校、非行・いじめなど特別な援助が個別に必要な学生を対象とし、チーム援助を必要とする。この三段階の援助サービスはそれぞれ重複して行なわれることに留意すべきである。

以上についての講義の後、チーム援助の演習としてのシナリオロールプレイを行なった。書籍『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門—学校心理学・実践編—』の「ナツコの保健室登校に関する援助」の事例をもとに<sup>4)</sup>、樽木講師が作成したシナリオに従ってチーム援助におけるコンサルテーションの進め方の一端を体験した。

今回取り上げられたのは、進級直後から欠席がちとなった小学校6年の女兒を対象とした事例であった。緊急避難的に保健室登校を勧めて開始したものの、保護者の不安と不満が状況の悪化を招きそうになった5月半ばに、初めて話し合いの場がもたれたという状況設定であった。コーディネーターである学年主任役が司会をし、学級担任、保護者、養護教諭役の4名、2組で演習に取り組んだ。

演習の手順は、1) 配役を決め、学年主任役がコーディネーターとして司会をする、2) 役の台本を読み、各自の援助について整理する、3) シナリオロールプレイを行なう、4) グループで印象を話し合い、その結果を全体に発表する、というものであった。

この演習の留意点としては、同じような状況でもチームが異なれば援助も異なり、正解などはないこと、そのチーム独自の援助案を相談することにある、との説明を受けた。

以上のように、大学での学生支援を念頭に置き、チーム援助に必要となる基礎理論を学ぶとともに、チーム援助のシナリオロールプレイ演習を通して、コンサルテーションを疑似体験した。

## (3) 【セッション3】本学におけるカウンセラーとのコンサルテーション

セッション3では、本学カウンセラーの木村講師が、大学という「教育現場における支援」に関して

研修を行なった。参加者が学生の支援に直接的なケア、および、コーディネーターとして携わるという観点で学習できるよう「場面緘黙の学生」のケースが事例として取り上げられた。

最初に場面緘黙の症状について基礎知識を学んだ。『精神障害の分類と診断の手引き』第四版(DSM-IV)によると、場面緘黙とは、選択性緘黙のなかの一つであるという。具体的には「家では話すことができるにもかかわらず、ある特定の状況(例えば学校などで、話すことが求められる状況)では、一貫して話すことができない」等の状況があり、「学業上、職業上の成績または社会的な交流の機会を持つことが著しく阻害される」状態が1カ月以上続いている症状であることが説明された。

木村講師は筆談を通じて、学生にどのような支援を受けたいかを聞き取ることができたという。さらに、この事例において、学生は授業時のグループディスカッションや意見発表などに制約があるため、授業担当教員にその理解を求める必要もある。そこで、木村講師は、学生本人と保護者の許可を得た上で、学生が学内で関わりと想定される教職員に情報提供を行ない、学生が必要とする支援を求めた。これは、学習面の支援については、カウンセラーでは対応しきれないからである。

大学入学時は初めての場所、体制、人間関係に直面し、学生は誰しも不安を持つ。木村講師の対応はカウンセラーとしての専門性が生かされたものだといえる。しかし、それは、「入学してきた学生が安心して大学生活に入ることができること」が、学生にとって当然の権利であるという当たり前のことが意識できているからこそ実践できたものである。また、似たような困難を抱えた学生に対する支援内容は共通点もあれば相違点もある。これまで蓄積してきた支援策を視野に入れながらも、目の前の学生の要望に応じた支援内容を常に検討する姿勢が求められる。私たち教職員は、「入学してきた学生が安心して大学生活に入ることができる」という、この当たり前の学生の権利を意識化することを今回のセッションから学ぶことができた。

加えて、関わりへの入り口を見つける上でカウンセラーの専門性は大きい。それは2つの点においてである。①学生自身が、支援に携わるカウンセラーや教職員との関わりへの第一歩を踏み出せること。②学生の支援に関わる教職員が学生の支援にあたる時、関わりへの最初の機会をどのように実践すれば良いのか、支援する教職員への適切な助言

者となり得ること。これらの理由から、大学での学生支援において、カウンセラーの専門性は大きな力となる。

適切な支援を行なっていくためには、カウンセラーが教職員に支援を依頼するだけでなく、教職員もカウンセラーに対して、支援方法に関する助言を求めたり、相談をしたりすることも大切だと木村講師は指摘する。なぜなら、支援は何らかのコミュニケーションを通じて行なわれるが、支援者の学生に対するコミュニケーション手段如何によっては、その支援者の手立てが「支援」となり得るか否かが左右されるからである。

今回のセッションを通じて、コーディネーターは、適切な支援を理解するとともに、「相談の方針を立てる」ことや「相談の体制をつなぐ」という役割が期待されていることを学ぶことができた。

#### (4) 【セッション4】 全体討論

まず榊木講師より、中学校におけるコンサルテーションについての事例が報告された。ここでの事例報告は、コンサルテーションそのものの具体的な経過や評価についての報告であったというよりは、(コンサルテーションを支える) チーム援助活動によってもたらされる各種ヘルパー同士の関係性に焦点をあてた報告であった。事例として挙げられたものは、講師がかつて勤務した中学校の学校行事(文化祭)に関するコンサルテーションであり、特に焦点があてられたのは生徒の主体的な活動を支える学年教師集団の協同性についてであった。教師たちは、文化祭(例えば学年劇)に取り組む生徒たちの個々の特徴の把握や課題の共有、あるいは生徒の主体的な活動を促進するために生徒のアイデアを取り入れた活動に努めるといったコンサルテーションを行なう。このような過程を通して、教師たちが形成する学年教師集団(チーム援助の活動)の協同性が活性化され、また、教師同士(ヘルパー同士)の関係性も多様な仕方で深まるという。一方、こうした教師集団の協同性の活性化や関係性の深まりを支えるものは、「生徒の成長」という〈願い〉を共有することにあるという。文化祭後にコンサルテーションの達成感と同時に活動への楽しみに関する喪失感を覚えた教師に対し、この教師の心情を理解した別の教師(ヘルパー)が慰労のことばを伝えて支えるといった後日談などにも言及があった。講師による上の通りの各種ヘルパー同士の関係性に焦点をあてた

報告は、本研修において本学における学生支援やチーム援助活動を念頭に置く参加者へ向けた、チーム援助活動への一種の促しであり励ましであっただろうと思われた。

最後に行なわれた全体討論では、「本学において、カウンセラーを含む教職員同士がどのように連携していくことが可能か」に代表されるトピックが取り扱われたことを記しておく。

#### 4. 初参加者の感想

初参加者から、次のような感想をお寄せいただいた。この方は、学生をどのように支援していけばよいか迷うなかで本研修会にご参加くださった。研修を通じ、支援に関して一定の「収穫」を得ると同時に、今後の「課題」も見出されたということである。なお、感想文という性質上、執筆者の意思を尊重し、敬体表現も含めてそのまま引用している。

支援の必要な学生に授業担当者という立場から関わる体験をいたしました。幸いその学生に対してはカウンセラーの先生と偶然に連携することができましたが、その体験を通して、2つの問題点に気づきました。1つ目はもしもカウンセラーとの連携がなかったら、専任教員が出来ることと出来ないことの見分けが難しく、一人では踏み込み過ぎた支援をしてしまう、あるいは踏み込み過ぎを恐れて結局何の支援もできない危険性があること、2つ目は、上述の連携が偶然の産物であったことから、次の機会に支援を必要とする学生と出会った時に同じような連携を得られることができるだろうか、という不安を覚えたことです。学科・センターの会議レベルではこのような問題が存在することを知らされていなかったからです。

そのような私の不安は、本研修会に出席し、セッションをこなしてゆく内に解決してゆきました。多くの気づきを得ることが出来ました。私個人にとって大きな学びであり、そして特に専任経験の浅い方にとってもきっと同様に役に立つであろうポイントは以下の4点になります。(1) 支援を必要とする学生の場合に、時には平等の原則とやや矛盾する特別扱いをする必要が生じる可能性もあるが、その時には「今はA君に苦戦状況があるのでこのように特別に扱っているが、次にBさんに同じ苦戦状況が生じたら同じように特別に扱う」という確信を得られるならば支援に携わること(2) 学生支援はノルマだから、当番だから、行な

うといった中途半端な気持ちで関わるのではなく、支援をしたいと心から願う気持ちのある人材が携わると機能すること(3) どんなケースにせよ、個人で対応するのではなくチームを組んでチームの一員として支援を行なうこと(4) 支援が必要な学生を自分が抱えていなくとも、後方支援をするチームに加わり、チームの支援活動を円滑に進めることを支える働きをすることで支援の働きに携われること、そして、この(4)の働きこそが、コーディネーターの役割であることを学べたのが、本研修会の収穫でした。

このことを理論として学んだのはほんの短い時間で、セッションの多くの時間は事例の検討に当てられていました。事例をもとに学べたのは大学での援助の必要性をよく知る講師を頂いたことによる利点だと感じました。自分自身、様々な場面で無力感に苛まれることがありましたが、今回の研修会の学びを通して、今後は学生の支援や後方支援に安心感を以て対応できるであろうという気がいたします。このようなチームが、大学組織の中に制度として組み込まれても尚、有機性を保ちつつ、その機能を真に発揮できるようにする、その方法を模索するのが今後の課題であろうと感じました。

#### 5. 研修会のまとめ

本研修会を通じ、教育機関としての大学における学生支援のあり方について理解を深めることができた。研修会で共有された理解としては、科目の単位や学士資格の取得の支援だけを目指すのではなく、大学生活において、学生が「生きやすく」なることや将来の目標を見つけるために支援者が寄り添う観点が必要だということであった。さらに、重要なのは、支援者が孤軍奮闘するのではなく、複数人の支援者から成るチームで支援を行なうということである。一人ひとりの支援者に注目してみても、守秘義務を守り、ヨコの信頼関係をもって支援に携わっていくこと、各自が可能な範囲の支援策を考えていくことが大切であることも学べた。

大学は、学生の学習面の困難など、カウンセラーだけでは解決できない問題に直面している。また、助言教員・指導教員も担当学生の困難を一人で丸抱えして、苦戦しているという。こうした問題に対して、研修を積んだコーディネーターが実践的に関わっていったらと願っている。

大学での援助の必要性を熟知した二人の講師にお

越しただけで、理論に終始せず、実態に即した実践的内容を学ぶことができた。さらに、今年度は総合教育センター・教職センターの教員にとどまらず、複数の学科から教員の参加をいただいた。これは大きな成果といえる。学年が上がるにつれ、学生は学科教員と関わりをもつ機会が格段に増えていく。このことをふまれば、本研修内容はセンター教員だけでなく、学科教員にも有効なものと考えられる。さらに、この研修会を通じて、学科教員とセンター教員との間で学生支援に関する連携がはかれればと期待している。

他方で、前年度からの検討課題であった本研修会の内容を小冊子化する案件が課題として積み残された。榊木講師から小冊子案が提示されたため、来年度以降に内容を検討していく必要がある。

研修会への参加希望者はメンバーに連絡していただけると有難い。一緒に学生への支援について考えていきたい。

## 参考文献

1. 石隈利紀：学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス－．誠信書房，東京，1999.
2. 過去2ヶ年度の報告については、下記を参照されたい。榊木靖夫，馬場千秋，榊原健太郎，橋口剛夫，倉山智春，大日向浩：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告．*帝京科学大学紀要*，10：273-277,2014. および、榊木靖夫，高田麻美，岩沼聡一郎，馬場千秋，橋口剛夫，榊原健太郎，倉山智春，大日向浩，淡路佳昌：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告（2）．*帝京科学大学紀要*，11：231-235, 2015.
3. 独立行政法人大学評価・学位授与機構：平成26年度大学質保証フォーラム報告書，同機構，東京，2015.
4. 石隈利紀，田村節子：石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門－学校心理学・実践編－．図書文化，東京，2003.